

NHK スペシャル取材班「続・インドの衝撃 - 猛烈インド流ビジネスに学べ - 」

文藝春秋社 2009年1月20日刊を読む

1. 21世紀は、中国とインドを合わせて「CHINDIAの時代」と言われていたが、それは幻に終わるのだろうか？
2. (1) 幾多の困難を乗り越えた「シリコンバレーのゴッドファーザー」カンワル・レキ氏に、現在の状況をどう見ているか聞いてみた。ちょうどインドに向かう途中で、乗り換えのために上海の空港にいるというレキ氏は、携帯端末ブラックベリーから返事を送ってくれた。

(2) 「ムンバイのテロは非常にショックでした。しかし、ビジネスは元に戻っています。世界経済が落ち着きを取り戻すまでには1、2年はかかるでしょうが、こういう厳しい時に成功してこそ起業家といえるのです。大きな変化は、必ず、新たなニーズや市場を生み出します。それに、行き場を失ったマネーや人材などのリソースも、豊富に手に入りますからね」
3. 国際ヘッドハンターのアンベカーさんも多忙な毎日を送っている。盤石なはずだった世界の一流企業から優れた人材を獲得する千載一遇のチャンスであり、また、危機に強いリーダーを必要とする企業にトップ人材を紹介する好機だからという。
4. 何が起きるかわからないインドの厳しい環境で鍛えられ、どこへ行っても、どう転んでも生き残る力を蓄えた印僑たち。世界じゅうが右往左往する「百年に一度」の荒波の中でも、新たなビジネスチャンスを探し出し、積極的に打って出ようとしている。
5. その同じ荒波の中でたじろぎ、守りに入ってしまうがちな我々日本人は、やはり、印僑たちのこの逞しさから学ばなければならないのではないか。
6. レキ氏は言った。
「世界は前へ前へと進んでいます。あなたは前へ進まなくていいのですか？ 取り残されていいのですか？ それがシリコンバレーの考え方であり、インドの考え方なのです」

[コメント]

大不況の中で「大変だ、大変だ」と嘆いていても仕方がない。本書を何回も読み、何をどうしたらよいか考えることはとてもよい勉強になる。

- 2009年4月18日林明夫記 -